＼実践レポート／

# 探究の窓

VOL.3

2022年度からスタートした「総合的な探究の時間」。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

## 地域、外部団体、他校との連携でつながりを広げ、生徒の学びを豊かにする

### 小瀬（おせ）高校（茨城・県立）

School Data

1899年創立／普通科（特別進学コース・教養コース・福祉コース）／生徒数94人（男子69人・女子25人）／進路状況（2023年3月卒業）大学4人、短大1人、専門学校5人、就職12人

### 探究のゴール設定を重視し、ルーブリックづくりから着手

茨城県常陸大宮市にある小瀬高校は、各学年1クラスの小規模校。少人数ならではの、きめ細やかな進路支援が特色だ。同校では、学習指導要領の改訂に先立ち、2020年度から探究活動のあり方を模索してきた。中心になって取組を推進してきたのが、金子容子先生だ。探究活動を「生徒の学びを充実させるチャンス」と受け止め、有志の教員に呼びかけて「探究活動を通して生徒にどのような力をつけてほしいか」を深めていった。「探究活動では、何を・どのようにするかが議論されがちだが、そもそも何のための探究活動なのか、生徒にどうなってほしいのかというゴール設定が重要だと考えた」と金子先生は振り返る。

そこで、最初に取り組んだのが、ルーブリックづくりだ。「主体的に自分の人生を生きる力」「人間関係形成力」「課題を発見し解決に向けて取り組む力」「持続可能な発展に貢献するための力」の4つを軸に、それぞれに小項目を立て、目標を設定していった。並行して、教務担当者と協働で具体的なカリキュラムを考案。2021年度から、3年間で5単位の総合的な探究の時間のうち2年生の2単位を「未来創生学」と位置づけ、地域をフィールドにした探究活動を行うこととした。

その頃、金子先生の目に留まったのが、認定NPO法人カタリバによる小規模校を対象とした「学校横断型探究プロジェクト」だった。同プロジェクトは、定期的に複数校をオンラインでつなぎ、生徒同士の交流会や講演会、テーマ別のゼミ、教員向け勉強会などを開催するもの。小規模校が抱えるリソース不足を学校の枠を超えた連携により補完することを主な目的とし、2021年度から本格的に始動した。

「当時は未来創生学を始めることは決まっていたものの手探りの状況だったので、オンラインで他校の生徒や先生とつながれる、外部の人に相談ができる、定期的な活動があることで見通しが立てやすいなどメリットがたくさんあると感じ、すぐに管理職に相談して参加を決めました」（金子先生）

こうして2021年度から始動した小瀬高校の探究活動。「試行錯誤しながら少しずつブラッシュアップしてきた」と金子先生は振り返る。2022年度にはワーキンググループが発足し、学校のグランドデザインを見直し、それを基にルーブリックを練り直した。より端的で生徒にもわかりやすいものに、探究だけでなく他教科にも通じるものにしようと、「自分を大切にする」「他者とつながる」「地域・社会に関わる」の3つの軸に再編。2023年度からは、それぞれの小項目について3つのステップを設けたルーブリックを使用している。

### 地域の人や他校の生徒と交わり、視野を広げ内省を深める

現在は、2年次の未来創生学を柱に、3年間を通して自分の興味・関心を突き詰

写真左から、特別活動部長の金子容子先生、進路支援部・2年生副担任の小松﨑真未先生。

取材・文／笹原風花

● 年間スケジュール

**1年　探究の基礎を身につけ、2年次の土台を構築する**

前期は、探究活動に必要なスキルやマインドを醸成する。①リサーチやアクションに必要なスキルを獲得する（情報収集と精査、統計の取り方など）、②自分の興味・関心を探る、③豊かな自己表現を目指す、などを意識した活動を行う。後期は、グループで実際に探究活動を試行し、社会課題に触れる。

**2年　「未来創生学」として本格的な探究活動を実践する**

前期は、地域課題（食、農業、林業、町づくりなどあらかじめテーマを用意）からグループで探究活動を行う。後期は、前期のテーマを深めても、自分で探究したい内容にシフトしてもOK。学校横断型探究プロジェクトや「IBARAKIドリーム・パス」※に参加。

※高校生を対象に、地域の課題解決や自分の夢の実現に向けた企画立案・実践活動を支援する茨城県教育委員会の取組。

**3年　変化・成長した自分をリフレクションする**

探究活動を通してどのような力がついたのか、どのような気づきがあったのかを整理する。自分自身をメタ認知して言語化することで、就職面接等に活かせる力が認識できるようにする。

1年次には地元の農家さんに、グループごとにインタビュー。課題や工夫について聞き、もう一方のグループに伝える（左上）。また、インタビュー前には、「どんな質問をすれば答えをさらに深められるか」をテーマに、グループで話し合いながらワークシートを埋めていく（右上）。さらに2年次には、卒業生が運営する古家具工房などを訪問（左下）。学校横断型探究プロジェクトにも参加し、オンラインで他校の生徒と交流しながら自身の探究を深めていく（右下）。

める探究活動を展開。1年次には、自分を知る、問いを立てる、表現する、地域を訪れるなど探究の基礎を座学やフィールドワークを通して学び、グループごとに課題を設定して探究を行う。後期には、例えば文化祭で来場者にアンケートを取るなど、実際に調査や実践を行う「プチアクション」に挑戦。自ら一歩踏み出すことで、2年次の本格的な探究活動の土台を構築する。

2年次は、前期はグループ探究、後期は個人探究を基本とし、フィールドワークを通して興味・関心のある地域の課題を見つけ、課題について調べ、情報を整理・分析し、まとめる…という一連の探究サイクルを2周回す。例えば前期は、鶏を平飼いして卵やプリンを販売している人、古家具をリニューアルして販売している卒業生、閉鎖した酒屋を観光名所に再生した人など、多様なバックグラウンドをもち自分らしい生き方をしている地域の人に話を聞きに行く。「いろんな生き方があること、いろんな大人がいることを知り、自分はどう生きるか、どう生きたいかを生徒自身が考え、探究テーマを見つけるきっかけにするのが目的」と金子先生。質問をする、聞いたことをまとめる・伝えるといったスキルを身につけることも意図している。

また、2年次には学校横断型探究プロジェクトに参加し、年3～4回ほど他校の生徒とオンラインで学び合う。6月には自分や学校のことを紹介し合うアイスブレイク交流会、7月にはゲスト講演会に参加。秋にはテーマが決まらない生徒に個別に対応するメタバース相談会が行われ、アドバイスをもらう生徒もいる。10月の探究テーマ別の交流会では、近いテーマで探究する生徒同士がつながり合い、ゼミ形式で自分の探究の進捗を報告したり悩みを相談したりする。さらに、2月には発表会が行われる。

今年度、小瀬高校に着任した小松﨑真未先生は、「普段はあまり発言しない生徒が積極的に質問をする姿が見られて驚いた」という。「オンラインかつ相手は他校の生徒という状況のなか、普段の教室とは違う関係性や心理的安全性が生まれているよう。他校の生徒や先生から評価されたり共感してもらったりするのも、新鮮で嬉しいようだ」と生徒の様子について語る。金子先生も、「最初は交流に消極的だった生徒も、実際にやってみると意外とできたと自信をつけたよう。年数回の交流の機会がマイルストーン的な存在になっていて、他校の生徒から刺激を受け、良い意味で負荷がかかり緊張感も生まれている」と効用を感じている。また、教員同士の交流による知見の共有やつながりの広がりも、金子先生、小松﨑先生にとって大変心強いものとなっていると言う。

さらに、最終の3年次には、探究で深めてきたことを踏まえて、どのような進路を選ぶのか、どう生きるのかといったライフデザインを描いていく。例えば、2年次に独居老人をテーマに探究をしたある生徒は、独りで暮らす地域の高齢者にインタビューを行った際に感じたことを踏まえて、就職に際してどのような介護福祉士になりたいか、どのような施設で働きたいかを深めていったという。

## 生徒の「やりたい」を引き出し、探究を生徒の未来につなげたい

「探究活動において重要なのは動機の源」と金子先生。「動機の源があることで、探究活動をキャリア教育や将来の生き方につなげていける」と言う。一方、この動機の源の希薄さは、課題でもある。

「本校の生徒の多くは、与えられたことにはしっかりと取り組みます。その素直さは長所でもあり、自分から次の一歩が踏み出せないという短所でもあり…。心からやりたいと思えることをなかなか見つけられない生徒が多いのが実情です。その壁をなんとか乗り越えてほしいと、探究活動では自分からアクションを起こすこと、独自のデータを取ることを課しています。地域の方々は本当に協力的で、高校生のためならと快く応えてくださり、メンターとして関わってくださる方もいます。この恵まれた環境を活かすためにも、生徒の〝やりたい〟を引き出すことが大事だと実感しています」（金子先生）

授業では、活動の折に触れてルーブリックを照合して自己を振り返る時間を設けている。「アクションの結果や最終成果物のクオリティで評価するのではなく、どのようなアクションを起こしたのか、探究活動を通して何を学んだのかというプロセスを重視している」と金子先生。ルーブリックに記された3つのステップについても、「全員がステップ3を目指すべきだということではない」と言う。

「自分の現状はどこに当たるか、以前に比べてどれだけ成長したか、自分はどこを目指したいか…を認識する目安としてステップを設けています。今後は、このルーブリックをさらに活用し、自分を大切にする、他者とつながる、地域・社会に関わるとはどういうことかを生徒自身が深めていけるようにしたいと考えています」（金子先生）

## まとめ

### 小瀬高校の探究のモットー

「何をするか」よりも「活動を通してどんな生徒を育てるか」を重視。
「昨日の自分よりも成長した」という実感や肯定感を大切に。

#自分を大切にする　#他者とつながる　#地域・社会に関わる

**課題の設定**

**フィールドワークを行い興味・関心事を掘り下げる**

1年次にはSDGsや社会課題から問いを立てる練習を行い、2年次には地域の人の話を聞いたりフィールドワークを行ったりして、自分の興味・関心事を掘り下げる。学校横断型探究プロジェクトのサポートも受けられる。

**情報の収集**

**自らアクションを起こし、独自のデータを集める**

インタビューやアンケート、フィールドワークなどを実施して情報を集める。生徒に自ら一歩踏み出す経験をさせるため、自分からアクションを起こすこと、独自のデータを取ることを課している。

**整理・分析**

**情報を精査・分析し、自らの仮説を検証する**

集めた情報を精査し、統計を取るなどして分析。データを基に、自ら立てた仮説を検証していく。今後は、統計の手法やデータの解析を学ぶシーンなどで、他教科との連携も視野に入れている。

**まとめ・表現**

**校内外に向けて発表し、フィードバックをもらう**

2月には、他校の生徒や教員に向けてはオンラインで、自校の生徒や教員に向けては対面で、パワーポイントなどを用いて成果発表を行う。さらに、「論文型報告書」に簡潔にまとめて提出し、3年次に振り返れるようにしている。

### 探究設計のPOINT

POINT 1 「何をするか」よりも「何ができるようになるか」を重視する

POINT 2 外部団体の協力を得て、他校と交流しながら進める

POINT 3 自らアクションを起こすこと、独自のデータをとることを課す

### 評価基準

ダウンロード可

**探究活動におけるルーブリック（一部抜粋）**

| | | STEP1<br>伸びしろだらけ! |
|---|---|---|
| 自分を大切にする | 自分を肯定的に捉えること | 自分は何に興味を持っているか、好きなことや嫌いなことは何か、などを言葉で表現できる。 |
| | 自己調整 | 感情的にならずにその場にいて、人の話を聞くことができる。 |
| | 自分の幸せに向かうこと | 何をしている時が幸せか、自分が大事にしたいことは何か、言葉で表現できる。 |



ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.449）